

アバール語における衝撃を 伴う接触動詞について*

山 田 久 就

1. はじめに

本稿の目的は、アバール語の接触動詞 k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」についてその用法と特徴を明らかにすることである¹。

アバール語はダゲスタン諸語（別名、北東コーカサス諸語）に属し、ロシア連邦ダゲスタン共和国ならびに旧ソ連からの独立国であるアゼルバイジャン共和国などで話されている²。ダゲスタン諸語は音韻、形態、統語的に似ているいくつかの語族からなる。また、ダゲスタン諸語はチェチェン語などのナフ語族（別名、北中コーカサス語族）とも音韻、形態、統語的に似ているので、両者をまとめてナフ・ダゲスタン諸語と呼ぶこともある。

本稿における接触動詞とは、接触するもの、接触する場所、接触するものを動かしている動作主の三つの関係を表しているが、動作主と接触する場所を項とし、接触するものを項としない二項動詞を意味する³。「接触する場所」という語は抽象的な意味で用いていて、体の一部やその主である人間や動物であることもある。アバール語では、境界上にある周辺的な動詞も含めると、k'abize「たたく」、AM-uxize「何度かたたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」、x'un'kize「角で突く」、x'un'size/x'un'chize「刺す」、x'waze「さわる」、x'at'ize「さわる」、zink'k'ize「つねる」、gildize「くすぐる」、x'asize「搔く」、baize「キスする」、k'ochize「キスする」、ch'ik'ize「なめる」、x'anch'ize「噛む、噛みつく」、l'ux'ize「さする、なでる」、l'ul'aze「こする」、zurize「揉む」、k'wek'ize「揉む」、xapize「つかむ」、xaxize「乳を飲むために～を

吸う」などが接触動詞に分類される。

日本語の「～が～にさわる」のように接触する場所が対格や絶対格ではなく他の格で現れる動詞に関心が持たれるが、このような動詞では、主格・対格型の格体系を持つ言語では動作主が基本的に主格で現れるのに対して、絶対格・能格型の格体系を持つ言語では動作主が絶対格で現れたり、能格で現れたりする。アバール語をはじめ、ナフ・ダゲスタン諸語は基本的に絶対格・能格型の格体系を持つ言語であるが、接触する場所が絶対格以外の格で現れる接触動詞がナフ・ダゲスタン諸語に存在することは類型論的あるいは通言語的研究 (Klimov & Alekseev 1980: 180-181, 184-185, Tsunoda 1985, Palmer 1994: 82-83, Lazard 1998: 146, Malchukov 2005) でも言及されている。アバール語のこのタイプの動詞についての言及は、Bokarev (1949: 28-33), Alekseev & Ataev (1997: 106-107), Islamova (1999: 107), Mallaeva (2002: 131, 172), Nurmagomedova (2007: 76-78) などで行われているが、どれも広いテーマ扱った研究のごく一部で扱われているもので、十分には記述がなされていない。筆者は、山田(2007)で、先にあげたアバール語の接触動詞のそれぞれがどのような格枠組みを取るのかについて明らかにしている。しかし、いろいろな言語で意味的に対応する単語には、統語的な振る舞いが似ているか似ていないかに関係なく、それぞれの単語が含んでいる意味の範囲や用法などにかなり違いがあることも多いので、言語間のより深い比較を行う場合、それぞれの単語の意味、用法、特徴に関してある程度深く知っていることが必要になる。そこで本稿では、接触動詞の中でも中心的な位置にあると考えられる、接触することによってある程度の衝撃を与えること表す接触動詞である k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」、AM-uxize「何度かたたく」に焦点をあて、特に、接触するものを絶対格ではなく、位格で示すことを基本的なパターンとする k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」に関して、意味、用法、特徴を明らかにしていく。

ここで、本稿を理解する上で、不可欠と思われるアバール語の文法につい

て述べることにする。先にも述べたように、アバール語は絶対格・能格型の格体系を持っている。名詞、代名詞の一部だけが絶対格・能格型で、残りは中立型、主格・対格型である言語も世界にはたくさんあるが、標準アバール語では全ての名詞、代名詞が絶対格・能格型である。あるものあるいは人が変化すること意味する自動詞とその変化を誰かあるいは何かが引き起こすことを意味する他動詞の対がアバール語にもたくさん見られるが、対となる自動詞と他動詞は命令形以外では同じ形式をしている⁴。たとえば、「育つ」を意味する自動詞と「育てる」を意味する他動詞は、不定形ではともに AM-izhize であり、現在形ではともに AM-izhula である。一方、命令形では自動詞が AM-izha になり、他動詞が AM-izhe になる。また、アバール語の能格は他動詞の動作主（あるいはそれに準じる）以外の役割でもいろいろと用いられ、「～が～を刀で殺す」のような文の道具「刀で」も能格で表される。アバール語には絶対格、能格以外に与格、属格ならびにそれぞれ五系列から成る位格、向格、奪格、経路格がある。位格、向格、奪格、経路格の第一系列から第五系列の基本的な意味はそれぞれ「～の表面」、「～(人間など)の所」、「～(平面など)の中」、「～の下」、「～(立体など)の中」である。また、場所を表す副詞も名詞の位格、向格、奪格、経路格に平行して変化する。便宜的に、副詞の位格、向格、奪格、経路格と呼ぶことにする。

以下、k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」に関して、まず、第2節で、その基本的なあるいは比較的基本的な用法と考えられるものについて述べた後で、第3節で派生的な用法、比喩的な用法について述べることにする。

2. 比較的基本的な用法

アバール語の接触動詞における動作主、接触する場所、接触するものが現れる格の組み合わせには表1のような四つのパターン(a), (b), (c), (d)がある。

表1 接触動詞の格の組み合わせ

	動作者	接触する場所	接触するもの
(a)	能格	位格	絶対格
(b)	能格	位格	能格
(c)	能格	絶対格	能格
(d)	絶対格	位格	能格

本稿で対象とする k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」は、基本的には、すなわち、大多数の使用例において、パターン(a)を示すが、時に、パターン(c)やパターン(b)を示すこともある。

最初に、基本的なパターンであるパターン(a)の場合から始める。(1)、(2)、(3)はそれぞれ、k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」が使われている例であり、動作主が能格、接触する場所が位格、接触するものが絶対格になっている。接触するものは項ではない⁵。例文での括弧は項でないことを意味することとする。

- (1) Musatsa G'isada (zar) k'abuna.
Musa・ERG Isa・LOC1 (こぶし・ABS) たたいた
「MusaがIsaを(こぶしで)たたいた。」
- (2) Musatsa g'azhalda (kwer) k'ut'ana.
Musa・ERG 肩・LOC1 (手・ABS) 軽くたたく
「Musaが肩を(手で)軽くたたいた。」
- (3) Musatsa G'isada (kwer) tunkana.
Musa・ERG Isa・LOC1 (手・ABS) 押した
「MusaがIsaを(手で)押した。」

一方、AM-uxize「何度かたたく」も k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」と同様に、ある程度の衝撃を持って接触することを表す二項動詞であるが、AM-uxize「何度かたたく」はパターン(c)だけを示す。(4)はその例であり、動作主が能格、接触する場所が絶対格、接触する

ものが能格になっている。接触するものは項ではない。AM-uxize「何度かたたたく」は接触するものが(4)のように人（あるいは生物）である場合、何度かたたたくことによって「ある程度のダメージを与える」というニュアンスを持つことが多い。

- (4) Musatsa (kweral") G'isa wuxana.
 Musa・ERG (手・ERG) Isa・ABS 何度かたたいた
 「Musaが(手で)Isaを何度かたたいた。」

k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」には便宜的に「たたく」という訳をつけているが、日本語の「ける」などにも対応し、接触するものは体の一部（手、足、頭など）あるいは体の一部に接触しているもの（手で握っている棒など）なら何でもよい。接触するものが xwalchen「剣」、xanzhar「短剣」、nus「ナイフ」のように刃の鋭いものである場合、日本語の「たたく」だと刃でない部分を何かに当てることを意味するが、アバール語の k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」は切るために刃の部分を何かに当てることを普通は意味する。k'abizeだと「切りつける」、k'ut'izeだと「切れ目を入れるために当てる」というような意味になる。もちろん、刃でない部分でたたくことを表現することもできるがはっきりとわかるような説明を付ける必要がある。また、k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」は接触するものとして ts'al「むち」や kwar「ひも」のようなやわらかいものを取ることもできる。日本語では「むちでうつ」となる。一方、AM-uxize「何度かたたく」は接触するものとして xwalchen「剣」、xanzhar「短剣」、nus「ナイフ」のように刃の鋭いものを取ることはできない。刃でない部分でたたくことを表現することもできるがはっきりとわかるような説明を付ける必要がある。刃の鋭いもの以外であれば、体の一部あるいは体の一部に接触しているものなら何でも接触するものとして選ぶことができる。ts'al「むち」や kwar「ひも」のようなやわらかいものでもよい。tunkize「突く、押す」も接触するものは体の一部あるいは体の一部に接触しているものなら何でもよい。ただ、tunkize「突

く、押す」で接触するものとして ts'al 「むち」を使うと、硬い柄の部分当てることを意味する。t'il 「棒」や xwalchen 「剣」、xanzhar 「短剣」、nus 「ナイフ」をある対象に向かってまっすぐ直線的に動かす場合は k'abize 「たたく」、k'ut'ize 「軽くたたく」、AM-uxize 「何度かたたく」は使えず、t'il 「棒」なら tunkize 「突く、押す」を使い、xwalchen 「剣」、xanzhar 「短剣」、nus 「ナイフ」なら tunkize 「突く、押す」あるいは x'unsize/x'unchize 「刺す」を使う必要がある。kwer 「手」、zar 「こぶし」、mal 「足」などは、ある対象に向かってまっすぐ直線的に動かす場合でも k'abize 「たたく」、k'ut'ize 「軽くたたく」、AM-uxize 「何度かたたく」を使うことができる。もちろん、tunkize 「突く、押す」を使うこともできる。k'abize 「たたく」と k'ut'ize 「軽くたたく」は意味的に近いが、何らかのダメージを与えようとする場合には k'abize 「たたく」が使われる。k'ut'ize 「軽くたたく」はドアをノックするような状況や後ろから肩とポンとたたいて存在を知らせるような状況でよく使われる。このような状況では k'abize 「たたく」は使われない。

比喩的な表現と言えるかもしれないが、(5)のように、k'abize 「たたく」が絶対格で現れる接触するものとして人間を取る場合もある。(5)は「つかんだままで地面にたたきつけた」ことを意味している。

- (5) Musatsa G'isa g'odow k'abuna.
 Musa・ERG Isa・ABS 地面 [ADV]・LOC たたいた
 「Musa が Isa を地面にたたきつけた。」

上記の二項動詞以外の動詞を使って、「たたく」や「ける」のようなある程度の衝撃を持ってあるものをどこかに接触させることを表すことができる。使われる動詞は AM-aze および ch'waze である。AM-aze はかなり多義的な動詞で、自動詞の用法と他動詞の用法があるが、他動詞の用法では、(1)「(～を～に)掛ける」、(2)「(～を～に)つるす」、(3)「(～を)まく」、(4)「(～を)建てる」、(5)「(ある期間を)過ごす」などの意味を持っている。AM-aze が「たたく」や「ける」のようなある程度の衝撃を持ってあるものをどこかに接触させること

を表す場合、動作主が能格、接触する場所が位格、接触するものが絶対格になる。この意味で AM-aze を使う場合、二項動詞ではなく三項動詞となり、接触するものを具体的に表現しなければならない。接触するものとしては、zar 「こぶし」、mal 「足」、kwach 「動物の足」、l'lar 「角」、t'il 「棒」、nus 「ナイフ」などいろいろなものが使われるが、何でもいいというわけではない。たとえば、絶対格名詞を k'al 「口」にすると「噛む、噛みつく」という意味になるし、絶対格名詞を k'wal 「腕」にすると「抱く」という意味になる。

もう一つの動詞 ch'waze もかなり多義的な動詞であり、自動詞としても他動詞としても用いられるが、他動詞としては、主に二つの意味を持っている。一つは「殺す」という意味である。「殺す」を意味する基本的な動詞はアパール語ではこの動詞だけである。もう一つは、抽象的に表現すると「何かをしばらくどこかに配置させておく」という意味を持っている。この場合、動作主が能格、配置されるものが絶対格、配置される場所が位格となる。たとえば、kwer nadalda ch'waze 「手を〈絶対格〉額に〈第一位格〉あてる」。これは、「額をたたく」ことを意味するのではなく、「手を額にしばらく置いておく」ことを意味する。xech mug'zada ch'waze 「槍を〈絶対格〉背中に〈第一位格〉刺す」。これは槍が背中に刺さった状態で残っていることを意味する。他には、shishil k'aldib mots'u ch'waze 「瓶の〈属格〉口に〈第五位格〉ふたを〈絶対格〉はめる」など。こうした用法では、配置されるものは項である。ある程度の衝撃を持ってあるものをどこかに接触させることを表す動詞として ch'waze を用いる場合、動作主が能格、接触する場所が絶対格、接触するものが能格になる。接触するものは項ではなく、ch'waze は二項動詞として用いられる。接触する場所として使えるのはかなり限定されていて、g'umer 「顔」、k'ark'en 「ほお」、k'al 「くち」、x'at 「手のひら」、k'ali 「太鼓」、zherg'en 「手で持つ打楽器の一種」ぐらいであり、かなりイディオム的である。x'at 「手のひら」を使った場合の x'at ch'waze は「拍手する」のように両手を何度か当てることを意味し、接触する場所も接触するものともに x'at 「手のひら」となり、別に接触するものを能格で表現することはでき

ない。

k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」にもどることにする。k'abize, k'ut'ize, tunkize は自動詞としても使われる。自動詞として用いられた場合、「当たる」、「ぶつかる」の意味になり、接触するものと接触する場所だけが問題となり、接触するものは絶対格で、接触する場所は位格で現れる。k'abize, k'ut'ize, tunkize を他動詞的に使った場合は、絶対格で現れる接触するものは項ではなく、明示的に示されない場合、接触するものが何であるか文脈からも明らかにならないこともあるが、自動詞として使われた場合には、絶対格で現れる接触するものは項となり、具体的に表現する必要がある。(6)は、k'abize と k'ut'ize が自動詞として使われている例をまとめて示している。また、(7)は、tunkize が自動詞として使われている例である。

(6) Musal kwer G'isada k'abuna/k'ut'ana.

Musa・GEN 手・ABS Isa・LOC1 少し強めに当たった／軽く当たった
「Musaの手がIsaに少し強めに当たった／軽く当たった。」

(7) Dir bet'er ganch'ida tunkana.

私・GEN 頭・ABS 石・LOC1 ぶつかった
「私の頭が石にぶつかった。」

k'abize, k'ut'ize, tunkize を他動詞的に使った場合、接触するものは体の一部あるいは体の一部に接触しているものに限定されるが、k'abize, k'ut'ize, tunkize を自動詞として使った場合は、接触するものは体の一部あるいは体の一部に接触しているものであることもあれば、それ以外の場合もある。日本語の「ぶつかる」に意味的に対応するアバール語の動詞は第一に tunkize であり、絶対格で現れる接触するものにはいろいろなものを使うことができる。(8),(9)のように、自動詞として用いられている tunkize が人間や自動車など自身の力で移動するものを絶対格名詞にしていることはとても多い。(8)の tunkize の代わりに k'abize を用いて、人間などがぶつかることを表すこと

もできるが、使用頻度はかなり低い。tunkize の場合より k'abize を使ったほうが「強くぶつかる」ことを表す。一方、誰かが投げた石が何かにぶつかった場合などは、tunkize や k'abize を使って表現することはできない。k'abize, tunkize と違って、k'ut'ize は人間などが何かにぶつかることを表すことはできないし、誰かが投げた石が何かにぶつかることも表すことはできない。

- (8) Musa k'eda tunkana.
 Musa・ABS 壁・LOC1 ぶつかった
 「Musa が壁にぶつかった。」
- (9) Mashin awtobusalda tunkana.
 車・ABS バス・LOC1 ぶつかった
 「車がバスにぶつかった。」

少し比喩的な用法かもしれないが、g'awa「空気」なども「空気が顔に当たる」というような感じで、k'abize において絶対格で現れる接触するものとして使われることがある。

k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」の自動詞としての用法について述べたが、他動詞（あるいはそれに準じる動詞）としての用法にもどることにする。k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」は接触する場所を絶対格で表すことがある。すなわち、表1のパターン(c)である。

k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」を使って、打楽器である k"ali「太鼓」や zherg'en「手で持つ打楽器の一種」を演奏のためにたたくことを表現することができるが、この場合、接触する場所である k"ali「太鼓」、zherg'en「手で持つ打楽器の一種」は絶対格になるのが一般的である。ts'umur「鐘」も音を鳴らすためにたたく場合、絶対格になるのが一般的である。(10)は k'abize「たたく」と k"ali「太鼓」の組み合わせの例であり、k"ali「太鼓」が絶対格になっている。接触するもの、すなわち、手や棒などの音を鳴らす

ための道具は能格で表すことができる。

(10) Musatsa k"ali k'abuna.

Musa・ERG 太鼓・ABS たたた

「Musa が太鼓をたたいた。」

音を鳴らす目的でたたく場合に、k"ali「太鼓」、zherg'en「手で持つ打楽器の一種」、ts'umur「鐘」を絶対格でなく、位格にすることもあるが、絶対格であることがほとんどである。音を鳴らす目的以外でk"ali「太鼓」、zherg'en「手で持つ打楽器の一種」、ts'umur「鐘」を単にたたく場合は、絶対格にすることはできず、位格にして表現する。

k'abize「たたく」の絶対格名詞にtorg'o「ボール」がくる場合がある。多くの場合は、(11a)のように向格でボールの飛んでいく先を示すことが多いが、(11b)のようにボールの飛んでいく先を示さず、文脈からもわからない場合もある。これは、rexize「投げる」が向格で何らかが飛んでいく方向を示すことが多いが、示さない場合もあるのと並行的である。足などの接触するものは能格で表すことができる。

(11a) Musatsa torg'o dix"e k'abuna.

Musa・ERG 太鼓・ABS 私・ALL2 たたた

「Musa がボールを私にけた。」

(11b) Musatsa torg'o k'abuna.

Musa・ERG 太鼓・ABS たたた

「Musa がボールをけた。」

(12)は、k'abize「たたく」が接触する場所としての人を絶対格にしている。このような文がアバール語として容認される文であることを問題にしたい。

- (12) Musatsa G'isa k'abuna.
 Musa・ERG Isa・ABS たたいた
 「Musa が Isa をたたいた。」

アバール語の一部の方言では、接触する場所としての人を絶対格にして k'abize「たたく」を用いるのは普通である。私が調査したヒダス (Gidatl') 方言やケレブ (Keleb) 方言でもこのような文は問題なく容認されるし、ヒダス方言の話者が書いたテキストにもこのような文が見られる⁶。接触する場所としての人を位格にした場合と絶対格にした場合には意味の違いが出てくる。接触する場所としての人を絶対格にすると、「何度かたたいてある程度のダメージを与える」という意味になり、AM-uxize と同じような意味になる。

それでは、標準語ではどうであろうか。Nurmagomedova (2007: 78) は k'abize「たたく」、tunkize「突く、押す」、x'waze「さわる」、zink'k'ize「つねる」、x'anch'ize「噛む、噛みつく」などの接触動詞について言及した後、行為が対象の一部だけ及ぶ場合は位格が使われ、対象全体に及ぶ場合は絶対格が使われると述べていて、k'abize「たたく」、tunkize「突く、押す」が人間 (dow「あの人」) を絶対格で取っている例をあげている。しかし、筆者は、この意見に賛成することはできない。k'abize「たたく」が接触する場所としての人を絶対格にしている文は標準語では容認されない文であるとみなすべきであると考ええる。筆者が調べたテキストにこうした用法の実例が2例あるが、これは方言からの影響であると考ええる。

それでは、tunkize「突く、押す」の場合はどうであろうか。(13a) のように、tunkize「突く、押す」を向格と組み合わせて用いて、「何かを押すことによってそれを何らかの方向へ移動させる」ことを表現することができる。この場合、接触する場所としての人は絶対格にして用いられることがある。日本語で「～を～に押す」というような表現に近いが、日本語の「～を～に押す」の「～に」は動作主があるものを移動させるために力を向ける方向を示しているのが一般的であるが、アバール語のこの用法の場合、必ずしもそう

ではない。(14)がその例である。日本語では「～をベットから下へ押した」は変である。(14)で動作主の力が向けられているのは下へではなく、水平方向である。

(13b)のように、移動する先を示す向格をとまわずに、接触する場所としての人を絶対格にした文は容認される文であろうか。私が調べたテキストにはこのような文の実例はないが、何人かの母語話者にこのような文の容認度について質問調査したところの結果は微妙である。完全に駄目だと判断することもできなし、完全によいと判断することも難しい。ひとつの理由は、移動する方向を表す向格を連想してしまって、よい文とみなしていることも考えられる。さらなる広範な調査が必要である。

(13a) Musatsa G̃isa kʷatʷiwe tunkana.

Musa・ERG Isa・ABS 外 [ADV]・ALL 押した

「Musa が Isa を外へ押す出した。」

(13a) Musatsa G̃isa tunkana.

Musa・ERG Isa・ABS 押した

「Musa が Isa を押した。」

(14) Patimatitsa G̃isa krowataldasa gʷorkʷe tunkana.

Patimat・ERG Isa・ABS ベッド・ABL1 下 [ADV]・ALL 押した

「Patimat が Isa を押してベッドから下へ落としたりした。」

(11a)で kʷabize 「たたく」を使って、絶対格名詞をたたいてそれを向格で示されたところに移動させる用法、また、(13a), (14)で tunkize 「突く、押す」を使って、絶対格名詞を押してそれを向格で示されたところに移動させる用法を示した。少し比喩的になるが、kʷabize 「たたく」が naxʷe 「後ろに」(副詞の向格)を伴って、naxʷe kʷabize で「撃退する、打撃を与えて追い返す」という意味になる。(15)がその例である。日本語では「敵をたたく」で「敵にダメージを与える」ことを表現することができるが、アバール語では kʷabize 「たたく」単独では「～にダメージを与える」ことを表現することは

できない。ただし、k'abize「たたく」を名詞化した k'abi は「打撃」を意味することがある。

- (15) Nizhetsa tushmanzabi nax'e k'abuna.
私達・ERG 敵・PL・ABS 後ろ [ADV]・ALL たたいた
「私たちは敵を撃退した。」

k'abize「たたく」には、向格ではなく位格で移動先を表現する用法もある。(16)は絶対格で現れている mag「釘」をたたいて、それを差し込むことを表現している。差し込まれる場所は位格となる。

- (16) Musatsa mag k'eda k'abuna.
Musa・ERG 釘・ABS 壁・LOC1 たたいた
「Musa が釘を壁に打ち付けた。」

(17)は(16)と似ているがその意味解釈は少し複雑である。明示的には現れていないが、釘を打って、x"arshshi「板」を床に打ち付けることを意味している。したがって、たたかれるのは、絶対格で示されている x"arshshi「板」ではなく、明示的には示されていない釘である。x"arshshi「板」が打ち付けられる場所は位格で示される。

- (17) Musatsa x"arshshi ch'arbida k'abuna.
Musa・ERG 板・ABS 床・LOC1 たたいた
「Musa が板を床に打ち付けた。」

k'ut'ize「軽くたたく」はたたいて何かを取り除くという意味で用いられ、(18a)のように、移動の方向を向格で表すこともあるが、(18b)のように、向格が現れないことも多い。

- (18a) Musatsa t'og'rodasa g'azu g'odobе k'ut'ana.
 Musa・ERG 帽子・ABL1 雪・ABS 地面 [ADV]・ALL 軽くたたいた
 「Musa が帽子を軽くたたいて雪を地面に落とした。」
- (18b) Musatsa t'og'rodasa g'azu k'ut'ana.
 Musa・ERG 帽子・ABL1 雪・ABS 軽くたたいた
 「Musa が帽子を軽くたたいて雪を取り除いた。」

最後に、パターン(b)について述べる。k'ut'ize「軽くたたく」は(2)のように接触するものを絶対格で示すのが一般的であるが、(19)のように接触するものが能格になっていて、表1のパターン(b)を示している文が使われることがある。k'ut'ize「軽くたたく」がパターン(b)で用いられるのはごくまれであるが、私が調べたテキストに2例ではあるが実例がある。

- (19) Musatsa zherg'ada (kilshshatsa) k'ut'ana.
 Musa・ERG 打楽器の一種・LOC1 (指・PL・ERG) 軽くたたいた
 「Musa が打楽器の一種を指で軽くたたいた。」

(19)のようなk'ut'ize「軽くたたく」がパターン(b)で用いられている文の容認度に関して母語話者への質問調査を行ったところでは、接触する場所と接触するものの組み合わせによって容認度に差があるようである。現時点で断定的なことはいえないが、方言差、標準語では地域差も容認度に反映するのかもしれない。この点に関してもさらなる広範な調査が必要である。k'ut'ize「軽くたたく」と違って、k'abize「たたく」、tunkize「突く、押す」はパターン(b)を示すことはない。

3. 派生的、比喩的な用法

この節では、k'abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」の派生的あるいは比喩的と考えられる用法について述べていく。

3.1 k'abize 「たたく」

3.1.1 他動詞としての用法

k'al「口」を絶対格にして k'al k'abize で「侮辱する言葉を浴びせる／暴言をはく」という意味になる。言葉を浴びせられる人は、第一位格で表される。(20)がその例である。

- (20) Musatsa dida k'al k'abuna.
 Musa・ERG 私・LOC1 口・ABS たたいた
 「Musa が私に侮辱する言葉を浴びせた。」

ts^humur は「鐘」の他にそれから比喩的に派生したと考えられる「ベル」という意味を持っていて、ts^humur を絶対格にした ts^humur k'abize はもともとは「鐘をたたく」だが、比喩的に「ベルを鳴らす」という意味で用いられる。ベルを鳴らす人を能格にして示すこともできるが、さらには、(21)のように、ベルがついている機器を能格にして示すこともできる。

- (21) Telefonal^h ts^humur k'abuna.
 電話・ERG ベル・ABS たたいた
 「電話がベルを鳴らした。」

「タイプライターでなんらかの文字を打つ」ことを表すのに k'abize を用いる。mashinka「タイプライター」は第一位格あるいは能格で現れ、kag^hat「手紙」のような打たれるものが絶対格になる。(22)がその例である。

- (22) Ditsa mashinkajalda kag^hat k'abuna.
 私・ERG タイプライター・LOC1 手紙・ABS たたいた
 「私はタイプライターで手紙を打った。」

tel「電報」を絶対格にして、tel k'abize で「電報を打つ」ことを意味する。電報のあて先は、名詞あるいは副詞の向格で表す。たとえば、rok^hobe tel k'abize 「家に〈第五向格〉電報を打つ」。

gol「ゴール」を絶対格にして、gol k'abizeで「(サッカーで) ゴールすること」を意味する。

kep「心地よい状態」を絶対格にして、kep k'abizeで「心地よさを楽しむ、心地よく時間を過ごす、快樂にいそしむ」ことを意味する。お酒を飲んだりして、心地よい状態になることである。k'abizeの代わりに、AM-uxize「何度かたたく」を使って、kep buxizeにしてもほぼ同じ意味になる。また、g'a-AM-ize「(1)～をする、(2)作る」を使ってkep g'abizeでもほぼ同じ意味になる。kep g'abizeが最もよく使われる。

k'abizeはl'im「水」やbi「血、血液」を絶対格で取り、「水、血を～に送る」という意味で用いられる。送られる先は名詞や副詞の向格で表す。(23)がその例である。bi「血、血液」が絶対格になる場合は、rak^「心臓」などが能格の動作主となる。

- (23) Nuzhetsa kanalaldasa rosul'e l'im k'abuleb bugo.
私達・ERG 運河・ABL1 村・ALL3 水・ABS たたいている
「私たちは運河から村へ水を送っている。」

itu「アイロン」を絶対格にして、itu k'abizeで「アイロンをかける」という意味になる。アイロンをかける対象はrat'lida itu k'abize「服に<第一位格>アイロンをかける」のように位格になる。「アイロンをかける」という意味では、ch`wazeやAM-ax"izeを使って、itu ch`wazeやitu bax"izeでも表現できる。

3.1.2 自動詞としての用法

自動詞での用法を三つあげるが、どれも、絶対格名詞だけを項とする一項自動詞としての用法である。(24)のように、rak^「心臓」を絶対格にして、rak k'abizeで「心臓が鼓動する」ことを表すことができる。

- (24) Rak' k'abuleb bugo.
 心臓・ABS たたいている
 「心臓が鼓動している。」

また, bi「血, 血液」を絶対格にして, bi k'abizeで「血液が波打つ」ことを表すことができ, ts'umur「鐘, ベル」を絶対格にして, ts'umur k'abizeで「鐘, ベルが鳴る」ことを表すことができる。

3.2 k'ut'ize「軽くたたく」

k'ut'izeの場合, 他動詞としての用法に派生的あるいは比喩的な用法はないので, 自動詞としての派生的あるいは比喩的な用法についてまとめる。絶対格名詞だけを項とする一項自動詞としての用法と絶対格名詞と位格の名詞あるいは副詞を項とする二項自動詞としての用法があるが, 先に, 絶対格名詞だけを項とする一項自動詞としての用法から始める。

rak'「心臓」を絶対格にして, rak' k'ut'izeで「心臓が鼓動する」ことを表すことができる。また, sag'at「時計」を絶対格にして, sag'at k'ut'izeで「時計がチクチク動く」ことを表すことができる。

以下は, 絶対格名詞と位格の名詞あるいは副詞を項とする二項自動詞での用法である。ber「目」を絶対格名詞として使って, 「見える」ことを表現できる。見える対象は第一位格になる。(25)がその例である。

- (25) Dir ber Pat'imatida k'ut'ana.
 私・GEN 目・ABS Patimat・LOC1 当たった
 「私には Patimat が見えた。」

(26)のように, g'in「耳」を使って「聞こえる」ことを表現でき, (27)のように, k'alal「鼻の穴〈複数〉」を使って「におう」ことを表現できる。ber「目」の場合と違って, g'in「耳」やk'alal「鼻の穴〈複数〉」は第一位格となる。聞こえる対象やにおいは絶対格になる。

- (26) G'ezul k'al'aj dir g'inda k'ut'ana.
 彼ら・GEN 話・ABS 私・GEN 耳・LOC1 当たった
 「彼らの話が私に聞こえた。」
- (27) Naftalinal'ul max^ k'alazda k'ut'ana.
 ナフタリン・GEN におい・ABS 鼻の穴・PL・LOC1 当たった
 「ナフタリンのにおいがした。」

pikru 「考え」を絶対格にして、「考えが浮かぶ」ことを表現することができる。rak^ 「心臓, 心」などが位格で現れる。(28)がその例である。

- (28) Rek^eda bat'i-bat'ijab pikru k'ut'ana.
 心・LOC1 いろいろな 考え・ABS 当たった
 「心にいろいろな考えが浮かんだ。」

x'ax'l'i 「白さ, 白いもの」, xinl'i 「暖かさ, 暖かいもの」など形容詞が名詞化したものを絶対格にして, ある性質のものが現れることを表現することができる。その性質が現れる対象は位格になる。(29)がその例である。

- (29) Bot'rol rasazda x'ax'l'i k'ut'ana.
 頭・GEN 毛・PL・LOC1 白いもの・ABS 当たった
 「髪の毛に白いもの(白髪)が現れた。」

(30)のように, k'awu 「さび」を絶対格にして, 「さびがする, さびる」という意味で使われる。さびができる場所は位格で表される。k'ut'ize の代わりに ch^waze を使って k'awu ch^waze でも「さびがする, さびる」を表現することができる。こちらの方がよく使われる。

- (30) Nusijalda k'awu k'ut'ana.
 ナイフ・LOC1 さび・ABS 当たった
 「ナイフにさびがついた。」

3.3 tunkize「突く, 押す」

3.3.1 他動詞としての用法

副詞 k'wat'i-AM-e「外に〈向格〉」を伴って, 絶対格で現れる何らかのものを口から押し出すことを表現することができる。x'ats'u「つば」や rag'abi「ことば〈複数〉」など具体的なもの, 抽象的なものなどいろいろなものを使える。(31)がその例である。

- (31) Musatsa x'ats'u k'wat'ibe tunkana.
 Musa・ERG つば・ABS 外 [ADV]・ALL 押した
 「Musa はつばを外に押し出した。」

3.3.2 自動詞としての用法

tunkize は「気に障る」というような意味で使われることがある。気に障るという感情を引き起こす原因が絶対格になり, 感情の主である人や rak^「心臓, 心」などが位格になる。(32)がその例である。

- (32) G'el'ul rag'abi dida tunkana.
 彼女・GEN ことば・PL・ABS 私・LOC1 当たった
 「彼女のことが私の気に障った。」

4. おわりに

本稿では, 前半部分で, アバール語の接触動詞 k'abize「たたく」, k'ut'ize「軽くたたく」, tunkize「突く, 押す」に関して, その意味的な特徴を述べた後, 接触動詞で問題となる, 動作主, 接触する場所, 接触するものがどのような格を取るのかを述べた。動作主は常に能格となる。接触する場所は基本的には位格になるが, いくつかの条件のもとで絶対格になることがある。これはある程度派生的な用法と言える。また, 接触する場所が位格である場合には, 接触するものは基本的には絶対格になるのが, k'ut'ize「軽くたたく」

の場合には能格になることがある。接触する場所が絶対格である場合には、接触するものは能格になる。本稿の後半部分では、それぞれの動詞の派生的、あるいは、比喩的な用法についてまとめた。

本稿で述べたことが、筆者自身の研究も含めて、多言語の比較に結びついていくことを期待している。

注

- * 標準アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、ラテン文字へ次のような転写を行って、標準アバール語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гь=г', гI=g', д=d, e=e, ж=zh, з=z, и=i, й=j, к=k, кь=k'', кI=k', л=l, ль=l'', м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, тI=т', у=u, ф=f, х=x, хь=x'', хI=x', ц=ts, цI=ts', ч=ch, чI=ch', ш=sh, шI=shsh, э=è, ю=ju, я=ja。アバール語で使われているキリル文字のラテン文字への転写には標準的な方法が確立しておらず、ここでの転写法は筆者独自のものであることをお断りしておく。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABL: ablative (奪格); ABS: absolutive (絶対格); ADV: adverb (副詞); AM: agreement marker (一致標識); ALL: allative (向格); ERG: ergative (能格); GEN: genitive (属格); LOC: locative (位格); PL: plural (複数)。ABL, ALL, LOCの後ろに数字がついている場合、それぞれの系列を表し、たとえば, ABL1, ALL1, LOC3はそれぞれ第一奪格, 第一向格, 第三位格を意味する。名詞の単数は表記していない。また, 単語を示す場合, 名詞は絶対格形で, 動詞は不定形で示す。本稿の元となる研究においては, 約100万語の電子化したテキストを分析した後, 対象となる文の容認性を判断するためにアバール語の母語話者に対する質問形式の調査を行っている。その際, 多くの方にアバール語のインフォーマントになっていただいた。ここで, 感謝の意を申し上げたい。当然のことながら, 例文の文法性, 容認性に関する最終的な判断は筆者によるものであるし, 記述内容に誤りがあった場合の責任は筆者にある。本稿は文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)), 研究課題:『現地調査とデータベース作成によるアバール語の現状と変容に関する社会言語学的研究』, 課題番号:17720076, 研究代表者:山田久就, 研究期間:2005-7年度, 基盤研究(C), 研究課題:『現地調査とデータベース作成によるアバール語の格配列と他動性に関する総合的研究』, 課題番号:20520366, 研究代表者:山田久就, 研究期間:2008年度~)から助成を受けている研究の成果の一部である。
- 本文中での単語の訳, 例文中での逐語訳では短く収まるように便宜的な簡単な訳をつけているし, 比喩的な用法でも便宜的に単語の基本的な意味をつけていることがある。
 - アバール語は山岳地帯で話されていることもあり, 方言差が大きい。また, 標準アバール語は日本語や英語などの標準語に比べて語彙, 音韻, 形態, 統語にお

いて話者間にかなり大きなばらつきがある。これは、マスコミュニケーションが一般にロシア語で行われていることなどによると考えられる。本稿でのアバール語は標準アバール語を意味することとする。

3. 本稿では、項という用語を動詞、形容詞などの意味解釈の上で不可欠な要素という意味で用いている。アバール語では、日本語と同様に文脈からそれが何か明らかな場合には名詞がよく省略されるので、英語のようにある動詞を使うとき、必ず、その動詞とともに項が現れなければならないわけではない。
4. 自動詞、他動詞という用語は格などの形態レベルと意味レベルの両方で用いられるが、本稿では自動詞、他動詞という用語を形態レベルの用語として用いている。単純に言うと、絶対格・能格型の格体系を持つ言語では、二つ以上の項を持ち、最も動作主的な項を能格で表示し、最も被動格的な項を絶対格で表示する動詞を他動詞と呼び、それ以外の動詞で絶対格の項を取る動詞を自動詞と呼ぶ。
5. ここにあげた動詞の絶対格で現れる接触するものを項ではないとしている基準は、接触するものが何であるか文脈から推測できない状況でも接触するものがよく省略され、文脈がない状況で接触するものが省略された文を母語話者に示しても、それが何であるかを聞き返したくならないというものである。項という用語に対して違った用い方がなされることもある。たとえば、k'abizeの絶対格を項とみなし、三項動詞としてのk'abizeと二項動詞としてのk'abizeがあるとみなす立場もあるであろう。本稿では、項という用語をあくまでもそれぞれの動詞が持っているパターンを整理するための道具として使っていて、項という用語の使い方に関して何かを主張しているわけではない。
6. アバール語は大きく北方方言と南方方言に分けられる。標準アバール語は北方方言に基づいている。ヒダス方言やケレブ方言は南方方言に属する。ヒダス方言はホトダ (Khotoda) 村出身の話者を対象に、ケレブ方言はケレブ地方からの移民が住むスタリスク (Stal'sk) 村のケレブ方言話者を対象に調査を行っている。

参考文献

- Alekseev, M. E. & B. M. Ataev (1997) *Avarskij jazyk*. Moskva: Academia.
- Bokarev, A. A. (1949) *Sintaksis avarskogo jazyka*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Islamova, Umuzhat A. (1999) *Prostoe predlozhenie v avarskom jazyke v sopostavlenii s anglijskim* (Kandidatskaja dissertatsija). Maxachkala: Institut jazyka, literatury i iskusstva im. G. Tsadasy, DNTs RF.
- Klimov, G. A. & M. E. Alekseev (1980) *Tipologija kavkazskix jazykov*, Moskva: Nauka.
- Lazard, Gilbert (1998) *Actancy*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Malchukov, Andrej L. (2005) Case pattern splits, verb types, and construction competition. In Mengistu Amberber & Helen de Hoop (eds.) *Competition and variation in natural languages: The case for case*. 73-118. Amsterdam: Elsevier.

- Mallaeva, Z. M. (2002) *Grammaticheskie kategorii avarskogo jazyka: Modal'nost, zalogovost'*. Maxachkala: Jupiter.
- Palmer, F. R. (1994) *Grammatical roles and relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tsunoda, Tasaku (1985) Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21. 385-396.
- Nurmagomedova, Èl'mira M. (2007) Sintaksicheskaja xarakterisika glagola avarskogo jazyka (Kandidatskaja dissertatsija). Maxachkala: Dagestanskij Gosudarstvennyj Pedagogicheskij Universitet.
- 山田久就 (2007) 「述語のタイプから見たアバル語の二項述語の格枠組み—接触動詞を中心に—」, 角田三枝他 (編) 『他動性の通言語的研究』, 149-161, くろしお出版。